

社会的弱者に対する看護大学生のイメージと受容度

—精神障害者とホームレスの比較—

篠原 清夫 (三育学院大学)

1. 問題の所在

社会的弱者に関する問題は、社会学の分野で「歪められたカテゴリー化」の問題として取り上げられてきた。我々が日常生活の中で支障なく他者とともに生きていくためにカテゴリー化は必要であるが、好井(2007)は不適切な意味が息づく歪められたカテゴリー化が数多く存在していることを指摘している。我々は日常生活の中で他者に対し様々なイメージを抱いて生活することを当然の行為として行っているが、歪められたカテゴリーで他者を認識することにより、あるカテゴリーの人々を排除する可能性をも秘めている。

精神障害者に対する認識に関しての調査研究は数多いが、中村(2001)はそれまでの研究動向をまとめ十分になされているとは言えないとしており、現在も研究が進められている状況である。一方、日本のホームレスに対する態度に関しての調査研究は、太田ら(2002, 2004)、占部ら(2006)、篠原(2009)の研究以外なされておらず、これまであまり着目されてこなかった分野である。

看護・福祉分野学生に対する講義・実習や彼らの接触経験が精神障害者への態度に関連することがいくつかの研究では述べられている。しかし中村・川野(2002)は直接的接触によって肯定的に変化するわけではなく、接触志向や関心が否定的な態度の低減につながるとしており、個人が持っている志向や関心に鍵があることを示唆している。

基本的に医療の対象になる精神障害者と、医療の対象とはならないホームレスとでは、社会的弱者といえども人々のまなざしは異なるものと考えられる。看護・福祉系の教育現場ではホームレスについて学ぶ機会が少なく、原因を個人の努力の欠如として捉えられてしまう傾向があり、精神障害者よりも否定的なイメージで認識されていると予想される。

本研究は、看護大学生に精神障害者とホームレスに対するイメージ、受容度について調査し、その比較やイメージとの関連要因を探索することを目的とする。

2. 調査対象・方法・属性

対 象: A大学看護学部学生1年生51名、2年生53名の計104名

方 法: 調査票を配布後、回収箱を設置し、無記名で封筒に密封する方法で回収を実施

時 期: 2012年11～12月

回収数(回収率): 93人(89.4%)

性 別: 女子74名・男子12名(NA7名)

学 年: 1年生45名、2年生48名(精神看護学実習を行っていない)

3. 社会的弱者との接触経験・報道の視聴

精神障害者に関する「病院・施設などの訪問」の経験がある学生が34.4%、「ボランティア・クラブ活動」24.7%、「近所に精神障害者が在住」21.5%であった。ホームレスに関しては、「近所にホームレスが在住」とした学生が21.5%で比較的多かったが、「避難施設(シェルター)などの訪問」(4.3%)「ボランティア・クラブ活動」(5.4%)の経験は少なかった。社会的弱者に関するマスコミ報道に関しては、精神障害者の報道に関心があったのは33.3%、ホームレスに関しては37.6%であった。

4. 社会的弱者に対するイメージ

社会的弱者のイメージを調査した結果、精神障害者に対して、「あてはまる」とする回答が多かったのが「正直である」「善良な市民である」「つらい人生を送っている」であった。ホームレスに対して多かったのが、「つらい人生を送っている」「不潔である」「臭い」であった(図1)。

精神障害者とホームレスを比べた結果、18項目中15項目で有意差がみられた。特に「不潔である」「臭い」「十分に食事をとっている」で大きな差が見られた。「なまけものである」「正直である」「尊敬できない」「無責任である」「つらい人生を送っている」「嫌悪感がする」「法を守っている」「自分で自分のことを決定できる」に関しても1%水準で有意差が見られ、精神障害者と比べホームレスは不潔、臭い、なまけもの、無責任であるという否定

的イメージが強く、嫌悪感も高かった。

5. 社会的弱者に対する受容度

精神障害者に対する受容度合計得点の平均値は54.58、ホームレスは47.43で有意差が見られ、精神障害者と比較するとホームレスに対する受容度のほうが低いことが明らかになった。また、精神障害者とホームレスとの受容度合計得点間には正の相関($r=.539$)がみられた。

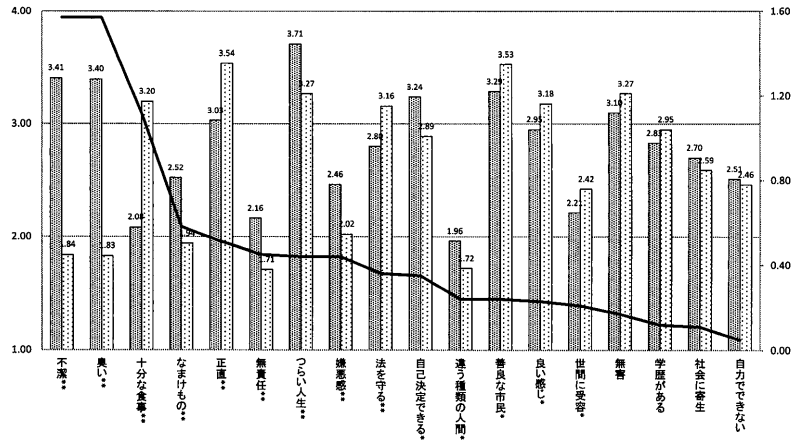


図1 精神障害者とホームレスに対するイメージ比較
(「非常にあてはまる」5点～「全くあてはまらない」1点)
t検定結果 **p<.01 *p<.05

表1 社会的弱者に対するイメージとの関連 (相関係数)

	受容度		社会考慮尺度		差別的用語認知度	
	精神障害者	ホームレス	精神障害者	ホームレス	精神障害者	ホームレス
つらい人生				.275 **		
自力でできない	-.320 **	-.218 *				
嫌悪感	-.341 **	-.563 **				
世間に受容		.290 **				-.211 *
正直	.258 *	.283 **				
良い感じ	.225 *	.466 **				
自己決定できる	.228 *	.221 *				
学歴がある	.214 *	.250 *	.223 *	.226 *		
社会に寄与						
違う種類の人間	-.445 **	-.408 **	-.252 *			
無責任	-.366 **	-.414 **	-.229 *			
不潔	-.398 **	-.384 **				
無害						-.223 *
善良な市民	.277 **	.530 **				
臭い	-.304 **	-.477 **				
十分な食事	.233 *					
なまけもの	-.297 **	-.460 **				
法を守る	.216 *	.306 **				

統計的に有意なPearsonの積率相関係数を表示 *p<.05 **p<.01

6. 社会的弱者のイメージとの関連性

(1) 基本的属性との関連

精神障害者の各イメージと性別とのCramerの連関係数を求めたところ有意な値を示す項目はなく、学年別では「嫌悪感がする」は1年生の嫌悪感が高かった。ホームレスのイメージをみた結果、「嫌悪感がする」は男子、「無責任」は1年生がやや多かった。

(2) 接触経験・報道への関心との関連

精神障害者との接触経験がある、報道に関心がある学生は、否定的イメージが少ない傾向にあることがわかった。またホームレスに関しても接触がある、報道に関心がある学生は、ホームレスに対する否定的イメージはやや少ない傾向にあることが確認された。

(3) 社会的弱者受容度との関連

各イメージ得点と受容度の合計得点を用いて相関係数を求めた結果、精神障害者、ホームレスともに77.8% (14/18) の項目間で有意な相関がみられた (表1)。

(4) 社会考慮尺度との関連

社会考慮得点が低い学生は、精神障害者は違う種類の人間、無責任だとイメージしており、社会考慮得点が高い学生は、精神障害者は学歴があるとイメージしていた。ホームレスの場合、「つらい人生を送っている」「学歴がある」と社会考慮得点とに有意な正の相関があった。しかし社会的弱者イメージと社会考慮との間に有意な相関がある項目は少なかった。

(5) 差別的用語認知度との関連

15の差別的用語の認知度と各イメージとの相関係数を求めた結果、精神障害者のイメー

ジは「無害である」、ホームレスは「世間に受容されている」のみに有意な相関がみられた。しかしその相関は弱く、社会的弱者のイメージと差別的用語の認知度との関連は高くないことが確認された。

7. 社会的弱者受容度と属性

社会的弱者の受容度をクラスター分析し3グループに分け、性別・信仰を用いて多重コレスポネンシス分析したところ、女性、信仰がある学生の受容度が低い傾向がみられた (図2)。

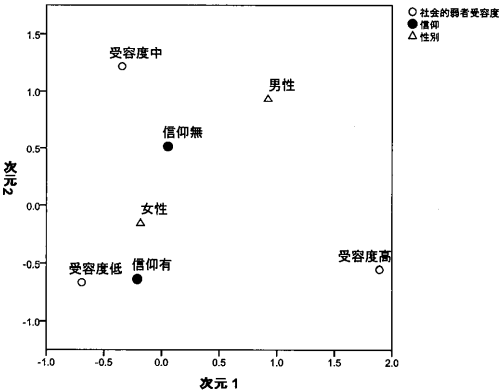


図2 多重コレスポネンシス分析結果